

三木清の死生観

——『人生論ノート』『人間の条件について』をどう読むか

玉 田 龍太郎

はじめに

三木清の『人生論ノート』全二三章において、一九三九年八月に雑誌『文学界』に掲載された第八章「人間の条件について」(1)(原題「人間の条件」、以下原題)は、この著作内で特別な位置を占めているように考えられる。この「人間の条件」執筆前後の三木の旺盛な著述活動を整理してみると、同年七月に雑誌『思想』連載の『構想力の論理』の既発表部分を「第一」と付して刊行した翌月にあたり(2)、また『人生論ノート』の次章に当たる「孤独について」が『文学界』に掲載されたのは一九四〇年四月のこととなっている。三木の『人生論ノート』は不定期連載であり、この八か月の中断の間、彼は『構想力の論理』続編連載開始(一九三九年九月)、再婚(同年十一月)、岩波新書『哲学入門』刊行(一九四〇年三月)と公私ともに多様な中、自分の哲学的思索の展開に

次への見通しを立てたのではなからうか。

ここで、三木自身が当時の自分自身の「自己」について語るところをみてみよう。三木は一九三九年一月に『都新聞』(『東京新聞』の前身の一つ)紙上で「人生の上でも、仕事の上でも、私はすでに多くのことを経験してきた。そして翻って考える時、私はやはり自分自身に還り、その上に腰を据えてやってゆくのはかないと思う」と年頭所感を述べている。当時この課題意識のもと、三木は雑誌『思想』の『構想力の論理』、雑誌『知性』の『哲学ノート』、そして雑誌『文学界』の『人生論ノート』の連載執筆に取り組んでいたが、加えて彼は「わが長期建設策はと問われて、私の答えていきたいのは、この自分自身に還って仕事をすることである。まず主体を確立するということが、長期建設の要件でなければならぬ」として、この長期建設策の「一つの希望」として「民間アカデミズムともいふべきものを形成発展させること」を

述べている(3)。

『人生論ノート』の内容面からみても、三木はこの「人間の条件」の執筆段階において、「死」「幸福」「懷疑」「習慣」「虚栄」「名誉心」「怒」と進んできた一連の連載に通底したテーマを、人間の「条件」という観点から捉え直して、全体として一旦『人生論ノート』の主題を取り纏めているようにも考えられる。三木は『人生論ノート』において、各章のテーマとなった課題について、それぞれに適切な解答を与えるべく一見論理的に収斂させていくようにみせつつも、しかし同時に何か新しく自由な着想を得るべく自分の中にある哲学的な気づきを散りばめ拡散させていくような思考をしており、結果的に『人生論ノート』は「人間の条件」の終わりで彼自身のいう「救済」としての「一種芸術的な世界観」を表現すべく、単純すぎず、かといって難解すぎでもない、いわば「中間」(4)的な思考の複雑さをもった哲学的思索となっている。若き日の三木は『語られざる哲学』(一九一九年)の末尾において、「私の体系を求むる心が本当に私自身に迫るとき、もしくは私の生活がそれをさせずにはおかなくなるとき、私は今私の考察から脱した、これまで幾度となく考えた或いは未だ嘗て考えたことのない諸概念について思索を試みるであろう」と述べているが(5)、この思索の試みを著述という実践に移したものの一つとして、『人生論ノート』などの一連の連載を捉えることも可能であろう。

そこで、本稿では全体で六つの節から構成されている「人間の条件」を、『人生論ノート』における「人間の生命につ

いての論述ノート」として把握し、一つの「仮説」(6)として、三木が自らの死生観を踏まえつつ『人生論ノート』の著作全体に通底する基本テーマを提示した生命論として読んだとき、一体どのような「人間の条件」の解釈が可能であるかを各節ごとに検討したい。

一 「人間の条件」をめぐる逆説的なアナロジー

さて、三木の中間的な思考の複雑さは、『人生論ノート』「人間の条件」において「逆説的なアナロジー」(7)という仕方展開されていく。この観点から、まず「人間の条件」第一節において三木の「生命」についての基本的な考え方を概観してみよう。

三木によると、「自己」は「虚無」の上に浮いている、虚無の中の「一つの点」である。しかし自己は「虚無と一つのものではない」のであり、生命もまた虚無ではない。だが虚無は人間の条件なのであって、「それなしには人間が考えられぬもの」である。

自己が虚無と一つのものではないのに対し、人間は「その条件であるところの虚無と一つのもの」であり、生命とは人間における「虚無を掻き集める力」、「虚無からの形成力」である。しかし、生命によって「虚無を掻き集めて形作られたもの」という側面から人間について考えるとき、人間がそのうちに生命を宿している以上、やはり人間は「虚無と一つのもの」でありつつ、もはや「虚無ではない」という逆説的な在り方をとるといわねばならない。「人間の条件」を生命論

としてみると、生命ある身体として人間は虚無ではないが、死して生命なき物となると、それは虚無である。こうして人間は虚無と一つのものでありつつも虚無そのものではないという逆説的な仕方、虚無は人間の条件であり、このように人間の条件として説明されたとき、虚無は人間の条件をめぐると一つの逆説的なアナロジー⁽⁸⁾であるといえよう。

それでは、当時「虚無」について、三木が語るころはどうか。三木は『人生論ノート』のなかで、「虚無」について「虚無」との関連において「人間的なすべてのパッションは虚無から生まれ、その現象において虚無的である」といい、人生から虚無を排するために「人生の実在性を証明しようとする者は虚無の実在性を証明しなければならぬ。あらゆる人間的創造はかようにして虚無の実在性を証明するためのものである」として、「人生の智慧はすべて虚無に到らなければならぬ」という⁽⁹⁾。つづいて、この考え方の理解を補う意味から、「人間の条件」第一節において更に提示された二つのアナロジーを検討していきたい。

まず、「人間の条件」第一節における一つ目のアナロジーは、「人生は泡沫のごとしという思想」に関わるものである。三木によると、人間の条件である虚無は、「海」が「泡沫や波」と一つのものであるように、人間と一つのものである。泡沫や波のように、海の上に浮いて現われるものが人間であり、ここにおいて海は人間の条件である虚無であるといえる。ただし、この泡沫や波と海との区別は、人間と虚無との区別と同一ではなく、単に類比的であるにすぎない。それゆえ、「人

生は泡沫のごとしという思想」の観点において更に「泡沫」と「波」とのレトリック上の区別についても、それぞれ考えられなければならない。三木によると、この波もまた泡沫の条件として考えられなければならないが、この「泡沫の条件としての波」という見地に立つて、泡沫を第一節における「自己」として捉えたと、波は次の第二節における「世界」として了解できる。即ち、自己の泡沫は世界の波に乗って揺蕩う「私」⁽¹⁰⁾であり、この三木のいう世界は更に第三節において現実的に「環境」へと展開していく。

この箇所を理解については、若き日の三木が「海」について語るところが参考になる。即ち三木は『語られざる哲学』において、人生を砂浜において貝を拾い集めることに例えたが、ここにおいて彼は「私達はこの広い砂浜を社会と呼び、小さい籠を寿命と呼び、大きな海を運命と呼び、強い波を死と呼び慣わしている。かようにして私達には多くの経験よりも深い体験が更に一層価値あるものであることは明らかである」という⁽¹¹⁾。また、環境と世界についていうと、三木は『構想力の論理』において、「ところで社会も我々にとって環境と見られる如く、制度も我々にとって環境と見られることができる。我々は制度によって我々のために新しい環境を創造するのである。物でなくフィクションが一層重要であるような世界のうちに我々は棲んでいる」⁽¹²⁾と述べていることも参考になる。

このように自己が「人間の生命」を帯びたものとなり自分が人生において果たすべき使命を、運命や死という人間存在

の有限性を顧慮しながら、社会との関わりを意識しつつ考察していく三木のアナロジー思考の観点に立つとき、彼は「人生は泡沫のごとし」という思想⁽¹²⁾において、人間の条件である虚無を掻き集める力、人間の条件である虚無からの形成力である「人間の生命」が、如何にして自らの力を駆使するかを考察しているといえよう。

このような思考の延長線上に、「人間の条件」第一節における二つ目のアナロジーである人間の「死と生」とが立ち現われる。人間の条件である虚無と人間との関係は、「人間の「死」と「生」との関係と同様に相異なるものであるが、「人間の条件」を人間の生命の論述ノートとして読むとき、人間もまた一個の生物である以上、生物における「生」の側面と「物」の側面という二面を考えなければならない。このうち人間のもつ物の側面、即ち人間の生の光に随伴する死の影の側面に注視して、逆説的に人間の生の意義を見出そうとする三木の独特の観点が、人間の「身体」と「精神」の二つに着眼点を取りながら、次の第二節において「物が人間の条件である」という着想へ発展していく。

それでは、この三木のいう人間の条件としての物を一体どのような仕方方で理解するとよいのか。見通しを立てるため結びを先取りし、この物が「人間の条件」第六節に至って何か「不定なもの」という在り方をとることも踏まえる⁽¹³⁾と、人間の条件としての物もまた「人生は泡沫のごとし」という思想⁽¹⁴⁾のもとに形なき不定なもの即ち「形なき形」に繋がっていくものとして考察されねばならないであろう。

二 人間の根本的条件としての虚無と形の本質的な基底としての虚無

「人間の条件」第二節において、更に三木は人間の条件について考察を深める。三木によると、人間の条件には虚無の他にも無数のものが考えられる。人間の身体の内面も精神の内面も、身体なら身体の内面も精神の内面も、精神なら精神の秩序のもとにおいて、具体的にいうと「細胞」や「心象」として「無数の要素」に分解可能であり、それらは互いに互いを条件づけながら関係しあっている。それゆえ「三木は」⁽¹⁵⁾「かようにどこまでも分解を進めてゆくならば、条件以外に何等か人間そのものを発見することは不可能であるように思われる」という。人間が自分の自己の存在を了解することはできるのは、人間存在は如何なる制約の下において可能となるのかという人間の条件を明らかにしていく仕方だけである。なぜなら世界の波に乗って揺蕩っている私の自己の泡沫は、一方で「世界の要素と同じ要素に分解され」つつも、他方でやはり「世界と異なる或るものとして存在する」のであって、ここにおいて再び「人間の条件」の結びを先取りすると、あくまで私の自己は「主體的」でなければならないからである。たしかに制約という意味からいうと、人間の条件は消極的なものである。それゆえ、三木によると、やはり人間は人間の条件とは「どこまでも」異ならねばならない。単に虚無の海上に、また世界の波上に揺蕩う泡沫にすぎない私の自己にとって「このことはいかにして可能であろうか」と三木は根

源的に問い、「人間の条件」において、私の自己が存在しうる可能性の根本的条件を考察していくという『人生論ノート』の見地を明確にする。

三木は、無限に大小の広がりをもつて捉えられる波としての世界もまた、人間の条件であるという。ただし波としての世界が人間の条件であるとしても、海としての虚無が「そのアプリオリ」であることに注意が必要である。ここにおいても、運命や死という人間存在の有限性を顧慮する三木のアナロギー思考の観点に注目しなければならないであろう。

前節で触れた箇所他にも、三木が波と海のアナロジーを『語られざる哲学』で用いる箇所がある。即ち「偉大なる人格の闇と憂鬱とは生命そのもの、私達の奥底に横たわる意志そのものの純粹にして自由なる闇と憂鬱とである。(中略)それらのものは彼らに於いて生命であり力であるが故に、時にはそれらのものは自分自身を否定して巨大なる光輝となつて輝き出でる。それ故に彼等の根柢にある闇と憂鬱の海はそれが白波となつて碎けて表面を蔽う快活のために見誤られ見逃されることがしばしばある」(15)と。この人間存在の闇に向けられる若き日の三木の眼差しは、見過ごすことができない。三木によると、虚無がアプリオリ、即ち先天的であるということは、「世界の物」は虚無という「人間の根本的条件」、即ち「人間の条件の条件」の制約下にあるということである。それゆえ世界の物もまた、それ自身、同時に「虚無であるもの」として人間の条件であるという在り方をとり、このような仕方では虚無は、私の自己が「世界の要素と根本的に区別さ

れる或るもの」として存在しうる可能性の根本的条件なのである。

それでは一体どのような仕方では、虚無がこの私の自己存在の可能性についての根本的条件となるのであろうか。それは「人間の条件」第三節において、虚無が人間の形成に関わるものへと転じていくという仕方において明らかとなる。三木によると、人間の根本的条件、即ち「人間の条件であるものの条件」としての虚無によって、はじめて「人生」は「形成」であるということがいえる。先述のように、社会との関わりを意識しつつ考察する三木のアナロギー思考の観点に立つとき、この形成の概念は世界ないし環境と、一体どのような関わりをもつてあろうか。

「人間の生命」として世界が「環境の意味」を帯びるのは、自己は生命としての私の自己であり、この自己の生命が虚無からの形成力として働き、逆説的ではあるが、人間が一方で虚無と向き合いつつも、他方で虚無を取り入れていくことができるからである。三木によると、人間が虚無という人間の根本的条件に向き合うことによって世界の物は「形」を与えられ、人間の生命にとって意味ある環境へと転じることができ。この観点に立つとき、世界の物は人間の生命にとって価値ある何かに変じていき、逆にいうと世界の物によって自己は自分自身をも価値ある自己へと形成させることができるのである。こうして、三木は「生命はみずから形として外に形を作り、物に形を与えることによって自己に形を与える」という。

ここまで人間の生命をめぐる三木の用いたアナロジーを基に、三木による人間の根本的条件としての虚無と形の本質的な基底としての虚無という「人間の条件」前半における二つの考察を追った。生命の光には必ず影としての虚無が付き纏うが、三木によると事態はむしろ逆説的であり、影があつてはじめて光が輝くという側面からみると、生命のほうが「虚無を掻き集める力」として主体的に虚無を受け入れる在り方をとるのである。

三 「人間の条件」における『構想力の論理』の予示的特性

さて、三木は「人間の条件」後半の始まる第四節から前半とトーンを変えて、自らの提唱する「構想力の論理」の特徴づけに入り、主著となるはずであつた『構想力の論理』の導入ともいふべき内容を論述する⁽¹⁶⁾。この「人間の条件」後半において三木が提唱するのは、「形の思考」である。三木によると、分解可能な無数の要素の間に認められる「関係」は「法則」において「定式化」できるが、この法則は「人間の条件」第二節における「秩序」⁽¹⁷⁾の観点に立つものであるといえる。しかし三木は、「生命は形」であり、たとえ世界が要素に分解され更に人間がこの「要素的世界」の内へと分解されることがあつても、この生命、この形という具体的なものは「抽象的な法則」に従つてその関係を把握できる要素的世界においては成立しえないし考えられないという。即ち、その成立も関係も変化も「ただ虚無を根底として」理解可能となるのが形なのであり、ここに形の「本質的な特徴」

がある。こうして、三木は「形成はつねに虚無からの形成である」という。

三木は後の『人生論ノート』の「秩序について」において、「現代物理学はエレクトロンの説以来物質というものから物性を奪い去つた。この説は全物質界を完全に実体性のないものにするように見える。我々は「実体」の概念を避けて、それを「作用」の概念で置き換えねばならぬといわれている。数学的に記述された物質はあらゆる日常的な親しさを失つた。／不思議なことは、この物質観の変革に相応する変革が、それに何等関係もない人間の心の中で準備され、実現されたということである」⁽¹⁸⁾という。このような現代の科学に向けた三木の視点は、一体どのような仕方で「人間の条件」における三木の思索のうちで発展されていくであろうか。三木によると、形は単に「実体」とか「関係」ないし「機能」といった概念に還元されるにすぎないものではなく、かえつて「両者の総合」なのである⁽¹⁹⁾が、「以前の人間」と「今日の人間」を取り巻いている人間の条件は大きく異なっているので、この総合も実は不可能である。この還元不可能性と総合不可能性を顧慮した「新しい思考」を、時代が求めているのである。

それでは、三木の考える新しい思考とは一体どのようなものか。つづいて「人間の条件」第五節において、三木の考える現代の新しい思考の「論理」を吟味していく。三木によると、以前の人間の環境は「形の見えるもの」として限定されていた。人間が精神においても身体においても、「はつきり

した形」をもって「性格」づけられていた。しかし「現代人」を取り巻く環境は「無限定な世界」となっており、世界の物は「すべてがアノニム（無名）のもの」であるにとどまらず「すべてがアモルフ（無定形）のもの」となっているので、現代人自身もまた「無性格」なものとなっている。

三木は、現代人の世界は「最も限定された結果」、逆説的に「無限定なもの」として生じたという。「実体的なもの」は関係に分解されて「関係の乃至函数的」に厳密に限定され尽くしているが、その結果かえって形としては無限定なものとなってしまうところに、現代人の無性格さの「特殊な複雑さ」がある。それゆえ三木は、現代人の「最大の問題」とは、このように「形のないものから如何にして形を作るか」にあるとする。この問題は先の「人間の条件」第二節の根源的な問いと三木による結びの主張とを考慮に入れると、私の自己の主体性に関わるものであるが、それでは現代人として私の自己は、この問題に対し主体的にはどのような実践態度をとるべきであろうか。

問題となるのは、現代人を取り巻く環境が高度に「特定の限定の仕方の発達した結果生じたもの」である以上、今日の人間によって「内在的な立場」ではなく「超越的な考え方」において解決が目指されねばならないということである。内在ではなく超越という観点は、科学を超え、観照ではなく芸術へと形成を捉えていくという視点のことである。即ち、ここにおいて三木は虚無からの形成を「科学を超えた芸術的ともいべき形成」と換言し、更に「観照的でなくて形成的な」

芸術的「世界観」を抱くことに現代の「救済」を見出そうとする。

三木はこの救済の方途として、「人間の条件」第六節において「形の生成は総合の弁証法であるよりも混合の弁証法である」という。「新しい形」が出てくるのは、「対立するもの」の総合というよりもむしろ「混合」からなのである。三木によると、「現代の混乱」において、あらゆるものが「不定なもの」として存在しているが、これらの不定なものが不定なもののまま「結合」してしまうことが「混合」の意味である。だが、これら「不定なものの不定性の根拠」は「虚無の存在」なのであり、混合についても不定なものが「虚無においてあり、且つそれぞれ特殊的に虚無を抱いている」ので考えられる。形のない虚無から形あるものは定まらないので、混乱の現代においては世界のものにも人間にも定まった形がない。虚無は「一般的な存在」だけではなく、あらゆるものの「それぞれにおいて特殊な存在」をもち、そして混合の弁証法とは、虚無からの形の生成、即ち「カオスからコスモスへの生成」である。こうして、三木は虚無からの形の生成の「意味をどこまでも主体的に把握すること」の重要性を説いて「人間の条件」の論述を結ぶ。

四 「人間の条件」と『哲学ノート』

ところで、一九三九年一月から九月まで八回にわたって雑誌「知性」に連載された『哲学ノート』は、未完に終わった『構想力の論理』の原型を断片的に示すものである。以上の

検討を踏まえて三木の『哲学ノート』をみたとき、その内容は同時期に書かれた「人間の条件」の理解を深める一助となる。

まず三木は『哲学ノート』『世界史の哲学』において、「時代に対する情熱の中から生まれる構想力、時代に対する認識と結び付いた構想力、すべての預言者のうちに生きている構想力、そのような構想力が今日の哲学者に必要である」(20)、自らの説く構想力の論理のもつ意義を強調する。そして『哲学ノート』『構想力の論理』において、「新しい論理は形を行為或いは実践の立場から捉えねばならぬ。形を実践の立場から捉えるというのは技術の立場に立つことである」とし、「新しい論理は科学の論理と抽象的に対立するものでなく、却つてこれに結び付き、これを媒介とするものである」という。即ち「この新しい論理を私は構想力の論理と呼ぶ。構想力の論理は形の論理である。構想とはもともと形を構想することの意味している。構想力の論理は形を作る立場に立つ、既にある形を観想する立場ではなく新たな形を創造する立場に立つ」(21)と。科学の論理を媒介しつつも、更にそれを乗り越える論理が「構想力の論理」であるということである。

つづいて三木は『哲学ノート』『出発点』において、「我々の哲学の出発点は実践的人間である。行為する人間は身体を有する人間であり、物があるとは単に意識の外にあるということだけでなく身体の外にあるということではなければならない、かかるものとして物は独立なものである」とし、「行為する人間はつねに世界のうちに、自然のうちに、特に社会のうちに

ある人間である。実践的人間は社会的人間である。かようにして実践の立場に立つならば、個人が独立のものであると同時に社会的なものであるということは、最も明瞭な事実である」(22)という。このような「身体」「物」、そして「世界」から「社会」へと展開する三木の『哲学ノート』の思索は、『人生論ノート』『人間の条件』の叙述へと収斂していった。

こうして三木はこの「社会」に注目する観点を、『哲学ノート』『形の哲学とゲマインシャフト』において次のように発展させていく。即ち「学問の専門的分化は学問の発達のために必要であつたけれども、その総合の方面が失われたということは近代社会の性質、そのゲゼルシャフトのアトミズムに規定されている」のであつて、ここで「直感的総合的」なことを特色とし「その根抵には形相の思想があつた」と考えられる「伝統的な東洋の科学」の意義に着目して、この「形相学的思考は社会的にいえば、ゲマインシャフトと結び付いている。形の哲学はゲマインシャフトの哲学であり、近代のゲゼルシャフトにおいては形の哲学は失われた」ことを指摘する。そして三木は「今日新たに形の哲学が要求されるというのは、近代的ゲゼルシャフトの行き詰りに対して新しいゲマインシャフト的社会が形成されねばならぬといふことと関連している」として、この「ゲマインシャフトは昔のゲマインシャフトと同じものであることができず、ゲゼルシャフトの要素を自己のうちに止揚したものでなければならぬ。丁度そのように、新しい形の哲学は昔の形の哲学にして近代的思考を自己のうちに止揚したものとして生れなければならぬ。それは

近代科学に媒介された技術的形態をモデルにして考えられると私がいうのも、その意味である」(23)というのである。こうして三木は『哲学ノート』『実体・関係・形態』において、「形態」について次のようにいう。即ち「ここに我々の考える形態概念は、いわば、実体概念と関係概念との総合である。古代的な実体概念が関係の概念を単に付帯的なものと見、また近代的な関係概念が実体の概念を廃棄しようとしたのに対して、新しい形態概念は実体概念と関係概念とを総合するのである」(24)と。

このように『哲学ノート』の連載のなかで考察された諸概念に基礎づけられつつ、『人生論ノート』『人間の条件』でいう「形の生成」としての「混合の弁証法」という発展的な立場が洞察されているのである。

おわりに

若き日の三木は『語られざる哲学』の終わりにおいて、私達の生活に於いて「価値の転換を遂行する」という見地から個性の問題を考究しているとしていた。三木は「とにかく個性とは永遠なるものに与り、(永遠なるもの)を求める限りに於いて成立するところのものである」(25)という。三木は『人生論ノート』後記の終わりにおいても、大学卒業の直前『哲学研究』に掲載した「個性について」を付録として加えた「自分の思い出のためにここに収録するという我儘」を弁明している(26)。

『人生論ノート』『人間の条件』における三木清の生命論か

ら分かるのは、人間の生命を形成するということは、虚無からの形成を实践するなかで、自らの具体的な生を充実させる主體的な現代人の振る舞いがどう個性として永遠なるものに与るべきか追究する態度である。それは形なき虚無に向き合って恐れない態度であり、かえって虚無を「主體的」に取り込む実践である。三木の主張する現代人の取るべき主體的な態度から、「デモニッシュ」なものに向けられた眼差しを観取するとき、この主體的な実践態度は三木の「人間存在の闇を見る眼」(27)のもつ意義の解明にも通じていくことになるうと思われる(28)。

若き日の三木は『語られざる哲学』において、次のようにいった。

「私たちは地上に執着してばかりいないで天井を仰ぐかまたは地下を見透すかをしなければならない。美しい青空には永遠なるものが輝いてそれへの憧れは私たちを夢みさせずにはいないだろう。暗い闇の中にも私たちは永劫の光あるものにぶつかってそれへの愛は私たちをまた夢みさせずにはおかないだろう。前者を私はイデアリストと呼び、後者を私はフマニストと名づける。前者はこの世のものを超越した永遠なるものを憧れ求めようとし、後者は醜悪なる人間性の中に宿る神性を見出そうという」(29)

更に三木は『構想力の論理』の序において、次のようにいう。「東洋においては形は主體的に捉えられ、かくして象徴的なものと見られた。形あるものは形なきものの影であり、『形なき形』の思想においてその主體的な見方は徹底した。(中略)

東洋的論理が行為的直観の立場に立つといつても、要するに心境的なものに止まり、その技術は心の技術であり、現実にも物に働き掛けて物の形を変じて新しい形を作るといふ実践に踏み出すことなく、結局観想に終り易い傾向を有することに注意しなければならぬ。ここにそれが科学及び物の技術の概念によつて媒介される必要があるのである」⁽³⁰⁾

藤田氏はこの『構想力の論理 第一』の「序」を参照しつつ、「西田が捉えた『形』は、形なきもの（無）を指し示す象徴として、どこまでも主観的に理解されている点を三木は批判した」として、「西田の『心の技術』に対して『物の技術』を対置しようという意図が、三木の『構想力の論理』にはあつたと言ふことができる」とする⁽³¹⁾。

三木は『構想力の論理』において、「人間存在の超越性とは何ら神秘的なものでなく、彼の自由に作り出すものが全く客観的なものであるという明白な事実のうちに人間存在の超越性がある」⁽³²⁾としつつ、「人間はつねに環境のうちにありながら環境と冥合的に生きるのではなく環境から超越しており、同時に逆に環境は人間を超越している。人間は主体として環境から超越すると共に環境は客体として人間を超越したものである」⁽³³⁾とする。

田中氏は、三木のいう「デモニッシュ」なものに「人間の環境からの乖離に由来する感情」を見て取る視点に注目する。田中氏によると、『構想力の論理』において三木のいう「形」の「超越性の契機」は「宗教的な意味でのそれではなく、具體的には人間の環境からの乖離」を意味するが、この三木の

「構想力」の哲学と『親鸞』との間に、『人生論ノート』の「人間の条件」における虚無を介して「パトス」的なもの或いは仏教的な「無常観」から連続性をみるとき、『構想力の論理』と『親鸞』それぞれに異なった位相においてではあるものの、「ロゴス」的なものと「パトス」的なものとの統合をみようとしていた三木の見地があるとのことである⁽³⁴⁾。

三木は『人生論ノート』「怒について」において、「怒る神にはデモニッシュなところがなければならぬ。神はもとデモニッシュであつたのである。しかるに今では神は人間的にされている、デーモンもまた人間的なものにされている。ヒューマニズムというのは怒を知らないことであろうか。そうだとしたなら、今日ヒューマニズムにどれほどの意味があるであろうか」といった⁽³⁵⁾。

このように三木は大学卒業後二〇年来の自分の哲学的な営為を振り返る機会を『人生論ノート』の連載から得ていることを踏まえると、三木のヨーロッパ留学前まで遡つて更に『人生論ノート』と三木の哲学上の原初的思索を比較考察することもできるであろう。これについては、別稿の課題としたい。

※ 本稿は兵庫県たつの市の霞城館にて、二〇二二年六月に行われた三木清研究会公開講演会・シンポジウムのパネラー発表用として当初「三木清の生命論」の表題で準備した原稿を下敷きとする。当日は東北大学教授の森一郎先生の御講演が延長したことから、同年九月の三木清研究会研究大会の場において詳細を発表したものである。

ここで京都大学名誉教授の藤田正勝先生、富山大学教授の宮島光志先生から頂戴した御助言を反映させ、論稿の表題を「三木清の死生観」と改めた。衷心より感謝申し上げます。

【註】

- (1) 三木清『人生論ノート』、『三木清全集』第一卷、岩波書店、二五四～二六〇頁。
- (2) 「人間の条件」と『構想力の論理』との関連については、津田雅夫『人為と自然―三木清の思想史的研究』、文理閣、二〇〇七年、二二九～二四三頁を参照。「この『構想力の論理』…括弧内引用者」序が書かれた一九三九年七月の次の八月、『人生論ノート』（『文学界』連載）のシリーズにおいて「人間の条件」と題されて、「不定なもの」の「混合の弁証法」こそが、まさに「構想力の論理」であると語りだされており、「人間の条件」には「むしろ三木の考える〈構想力の論理〉についての生きた具体的なイメージおよび内実を考えるうえで手がかりがある」（同、二二二頁）。
- (3) 三木清「自己を中心に」、『三木清全集』第十七巻、二七七～二七九頁を参照。
- (4) 三木の『パスカルに於ける人間の研究』（一九二六年、以下『パスカル論』）においての「正しき中間」という課題意識については、宮島光志『「中間者の哲学」という課題―三木清と環境の問題』、田中久文・藤田正勝・室井美千博編『再考三木清―現代への問いとして』、昭和堂、二〇一九年、七一頁を参照。
- (5) 三木清『語られざる哲学』、『三木清全集』第十八巻、九三頁。
- (6) 三木は旧制龍野中学時代の読書を振り返り、「生命の問題に関心をもつようになったことが、後に私が哲学に入る機縁となった」という。三木清『読書遍歴』、『三木清全集』第一巻、三七四頁。また「仮説」については、『人生論ノート』第一八章において一つの章が割かれて論じられている。三木清『人生論ノート』、『三木清全集』第一巻、三一七～三二二頁。
- (7) この逆説的なアナロジーという観点から『パスカル論』を考察した論稿として、河野洋子「アナロジー思考が開く逆説的結合の可能性―「考える葦」(『パンセ』)の再解釈に基づいて」、『臨床教育人間学』第三号、京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座紀要、二〇〇一年、一九～四四頁を参照。『人生論ノート』前章の「怒について」の終わりにおいて、三木が「アイロニーという一つの知的性質」に言及することからも逆説の観点が一つの解釈可能性を示すと考えられる（三木清『人生論ノート』、『三木清全集』第一巻、二五三頁）。
- (8) 三木のアナロジー思考は様々な観点から検証され得るものであり、たとえば『アリストテレス「形而上学」』（一九三五年）と『構想力の論理』における「自然と技術の類比（比論）」という着想⁹のもつ意義については、秋富克哉『「形」の哲学―アリストテレスと西田の間で』、『再考三木清』、一〇四頁。
- (9) 三木清『人生論ノート』、『三木清全集』第一巻、二三四頁。
- (10) 『私と世界』という〈視覚〉が、何よりも『もの』のうちに明確にされることが必要である（津田雅夫『もの』の思想―その思想的考察』、文理閣、二〇一一年、一五〇頁）。

- (11) 三木清『語られざる哲学』、『三木清全集』第十八卷、七〇頁。
- (12) 三木清『構想力の論理』、『三木清全集』第八卷、一八〇頁。この「人間の条件」において三木のいう「環境」を「社会」に眼差しを向けたものとみる視点については、室井美千博「あとがき——三木清逍遙」、『再考三木清』、二七六頁。
- (13) 「ここ」で重要なことは、一般的であれ特殊の「虚無」の存在」を根拠にして説かれる「もの」についての理解が、三木個人の思索を遥かに超えた思想的視野を切り開いてくれるということである」(津田雅夫『もの』の思想』、五三頁)。
- (14) 三木の技術哲学とアリストテレスの思想との関連から、秋富氏は「『形なき形』が個々の形の根柢でそれらを結びつけるものとして受け取られるとき、結びつける働き、つまり行為の主体性が際立てられる。それが主客を超えた構想力であり、その決定的な具体が技術であった」とする。秋富克哉「形の哲学——アリストテレスと西田の間で」、『再考三木清』、一一一頁。
- (15) 三木清『語られざる哲学』、『三木清全集』第十八卷、八九—九〇頁。
- (16) 三木が「虚無からの形成」のための方法論として「不定なもの」を基軸とした「混合の弁証法」を提起することについては、津田雅夫『もの』の思想』、四二—四三頁を参照。津田氏は、この提言の核心部分として「人間の条件」第六節を引用している。
- (17) なお「秩序」については、『人生論ノート』の第一六章において一つの章が割かれて論じられている。三木清『人生論ノート』、『三木清全集』第一卷、三〇二—三〇九頁。
- (18) 三木清『人生論ノート』、『三木清全集』第一卷、三〇六頁。
- (19) 森下氏によると、三木は『哲学入門』において「形」を二つの観点から定義しており、一つは「形」の実体的定義で、「この前提にはアリストテレスの実体概念がある」とのことである。もう一つは「形」の関係的定義で、これは「近代科学における現象間の規則的な関係を下敷きにしている」とのことである。森下直貴「三木は『西田哲学』を超えることができたか——コミュニケーションの『構造化』という視点」、『再考三木清』、一一九—二〇頁。
- (20) 三木清『哲学ノート』、『三木清全集』第十卷、四四〇頁。
- (21) 三木清『哲学ノート』、『三木清全集』第十卷、四五八頁。
- (22) 三木清『哲学ノート』、『三木清全集』第十卷、四五九—四六〇頁。
- (23) 三木清『哲学ノート』、『三木清全集』第十卷、四六三—四六四頁。
- (24) 三木清『哲学ノート』、『三木清全集』第十卷、四八三頁。
- (25) 括弧内引用者による。三木清『語られざる哲学』、『三木清全集』第十八卷、九二頁。
- (26) 三木清『人生論ノート』、『三木清全集』第一卷、三六一—二頁。ここにおいて『人生論ノート』の「個性について」の基となったといわれている研究ノートは、三木清『雑録』個性の理解』、『哲学研究』第五二号、京都哲学会、一九二〇年、七五〇—七五八頁。
- (27) 室井美千博「あとがき」、『再考三木清』、二七七頁。なお三木の学生時代の『語られざる哲学』や卒業論文「批判哲学と歴史哲学」から、人間存在の根幹に「宗教的要求」を認める三木の思索についての指摘は、岩田文昭「三木清の

哲学と宗教』、『再考三木清』、二六二～二六三頁。

(28) 「技術的に作り出される形は、まさに形ゆえに固定化し、その固定した形が社会や人間を均一的なものに作り変えてしまうのである。人間は固定化した形を否定する破壊的な行動や無定形や無秩序への逃避に、かろうじて主体性を見出さんばかりである。そこに現れるのは、人間のデモニーニシユな暗黒面に他ならない。形を変じ新しい形を作ることが却って虚無的な状況を生み出すとすれば、この逆説をどのように捉えるべきか。そこになお、どのような『虚無からの形成』を見出すことができるか」(秋富克哉「形の哲学」、『再考三木清』、一一一頁)。

(29) 三木清『語られざる哲学』、『三木清全集』第十八巻、七九頁。

(30) 三木清『構想力の論理』、『三木清全集』第八巻、一一頁。

(31) 藤田正勝「三木清の問い——その思索の跡をたどる」、『再考三木清』、一四頁。

(32) 三木清『構想力の論理』、『三木清全集』第八巻、一二九頁。

(33) 三木清『構想力の論理』、『三木清全集』第八巻、二四七頁。

(34) 田中久文「超越への『構想力』——三井清の親鸞論の可能性」、『再考三木清』、二四二～二四八頁。

(35) 三木清『人生論ノート』、『三木清全集』第一巻、二四六～二四七頁。